

ジャック・ラッセル・テリアの消化管ポリープに関する臨床および病理学的検討

二瓶和美¹⁾、鈴木敬子¹⁾、小野澤花純²⁾、中島 亘³⁾、斉藤 翼⁴⁾、内田英里⁴⁾、坪井誠也⁴⁾、チェンバース ジェームズ⁴⁾、内田和幸⁴⁾、小野憲一郎¹⁾

1)日本動物高度医療センター、2)サンリツセルコバ検査センター、3)日本小動物医療センター、4)東京大学獣医病理学研究室

犬の消化管ポリープはミニチュア・ダックスフンド (M.ダックス) の大腸ポリープがよく知られているが、近年ジャック・ラッセル・テリア (J.R.テリア) においても消化管ポリープを診断する機会が増加しており、M.ダックスに次いで診断頻度が高い。今回は J.R.テリアの消化管ポリープの臨床および病理学的特徴を明らかにすることを目的とした。**【症例と方法】**消化管ポリープが外科切除された 12 症例を用いた。症例ごとに性別、発症時の年齢、発生部位、病理診断を回顧的に調査した。病理学的には、HE 標本を用いて炎症の程度、増殖細胞の形態、浸潤性の有無を評価した。対照として M.ダックスの大腸のポリープ (42 症例) を用いた。**【結果】**ポリープの発生(初発)年齢は平均 6 歳 (1~15 歳)で、1 歳齢での発症が 1 例あった。性別は雄 8 頭、雌 4 頭で性差はなかった。発生部位は胃、小腸、大腸のいずれの部位にも多発性に認められ、特に幽門領域、十二指腸、直腸に好発していた。また上記 2 部位以上にポリープが発生した症例は 5/12 症例であった。病理学的には全て腺腫あるいは腺癌と診断された。一方、M.ダックスの大腸ポリープは発生年齢が平均 11 歳 (4~13 歳) と J.R.テリアより高齢であり、発生部位は大腸に限局し、腺腫が 42 例中 15 例および炎症性ポリープが 27 例で炎症性のポリープの発生が多かった。腺腫の組織像は J.R.テリアと M.ダックスで明らかな相違はなかった。**【考察】**J.R.テリアの消化管ポリープは再発性・多発性である点は M.ダックスの大腸ポリープと類似するが、若齢発症例が存在し、大腸以外のいずれの消化管にも発生すること、さらに腺腫発生後に腺癌が発生する傾向があることは特に重要な知見であり、犬種特異的な要因が関与している可能性が示唆される。人の若年性ポリポーシス症候群や家族性大腸腺腫症は特定遺伝子の変異に起因することが知られており、今後、J.R.テリアの本疾患の遺伝的背景に関する検討が必要と思われる。